

機関番号：12611

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2007 ～ 2010

課題番号：19330170

研究課題名（和文）

3歳から就学期までの環境移行における社会化・文化化についての追跡的研究

研究課題名（英文）

Longitudinal study of socialization and culturalization through environmental transition from 3 years old to period of entering school.

研究代表者 高濱 裕子 (TAKAHAMA YUKO)

お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・教授

研究者番号：10248734

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、幼児の対人関係を他者との対人的調整力から検討すること、家庭から幼稚園への環境移行を生態学的に検討すること、幼稚園の遊びと小学校の学習との関係を検討すること、大人の子どもへの期待と新たな文化化のエージェントへの期待を検討することであった。分析の結果、幼児期の親の発達課題が析出されたこと、初めての集団生活では子どものコミュニケーション能力に対する親の不安が高いこと、新たな環境への移行時に環境探索に向かえない幼児の動けなさが見出されたこと、環境移行においては子どもや教師が拠り所とする幼稚園や学校の文化・生活習慣などについての組織化された見方が意味をもつこと、小1プロブレムの解消に特化した幼稚園・保育所・小学校の連携では校種間の意識の温度差が際立ち、対等な関係を構築するのは困難なことなどが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research was to examine young children's interpersonal relationship from the viewpoint of personal adjustment power with others, to examine an environmental transition from the home to the kindergarten in ecology, to examine the relation between young children's play and children's study, and to examine socialization and enculturation from the viewpoint of developmental expectation of the agents. The followings have been found. The developmental tasks of parents were extracted. Parents showed high uneasiness in young children's communications skills. When transitioning to a new environment, young children were not able to explore for the environment by restricting the environment. The cooperation among the kindergarten, the day-care center, and the elementary school in which it had aimed at the classroom adjustment of the first grader did not form an equal relation.

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	2,300,000	690,000	2,990,000
2008年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2009年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2010年度	1,500,000	450,000	1,950,000
総計	7,000,000	2,100,000	9,100,000

研究分野：発達心理学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：就学前教育、環境移行、家庭教育、自律の発達、生態学的観点、
環境認知・環境定位

1. 研究開始当初の背景

(1) 児童期、思春期、そして青年期におけるコミュニケーション能力や対人的調整力の脆弱化が指摘され続けてきた。また“キレル”という語で示される情動制御の不全や欲求不満耐性の欠如が、小学校における校内暴力の増加と関連づけて報告された。

(2) これ以前には、授業中に立ち歩いたり、教室から出てゆくなどのいわゆる“小1プロブレム”の問題が指摘され、この原因を平成元年に改訂された幼稚園教育要領に帰属させる論調が目立った。

(3) このような現象出現の背景には、急激な社会的経済的変化やそれらが家庭教育に多大な影響を与えている可能性が推測された。

(4) 家庭から就学前教育施設そして小学校への環境移行を、社会化・文化化のエージェントをも含めて生態学的に検討する必要性が示唆される。

2. 研究の目的

(1) 社会的変化や少子化による対人関係の変化の実情を、他者との対人的調整力という観点から追跡的に検討する。

(2) 家庭から幼稚園への環境移行を、新たな環境の認知と環境への定位という生態学的観点から検討する。

(3) 幼稚園における遊びと小学校における学習との関係を、幼児期の心情・意欲・態度の発達と小学校での学びの発達という観点から検討する。

(4) 環境移行における社会化・文化化を、子どもにかかわる大人（保護者－幼稚園教師、幼稚園教師－小学校教師）の、子どもへの期待と新たな文化化のエージェントへの期待という観点から検討する。

3. 研究の方法

(1) 子どもが幼稚園の3歳児クラスに入園する直前から小学校入学直前までの約3年半にわたって、追跡的な質問紙調査による親の意識の変化を検討した。

(2) 附属幼稚園の3歳児クラスへの入園児が、新環境をいかに体制化してゆくのかを、入園時から3年間にわたって追跡的に観察した。

(3) 附属幼稚園から附属小学校への進学（移

行）を、遊びから学びへの活動の再編成という観点から追跡的に観察した。

(4) 幼稚園・保育所・小学校の連携に関する調査は、東北地区、関東地区、東京都区内、関西地区の全国11市区町村で実施された。地域に設置された全ての小学校、幼稚園、保育所を対象とした調査は、これまで実施されなかったものである。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果として7点が得られた。

① 3歳児の親にとっての発達課題とは、母子分離と子ども同士のトラブルの理解（関係の理解）の2点であった（表1参照）。この時期は、親と子ども双方の自立・自律がポイントになると考えられる。

表1 状況カテゴリによる分類結果

	子ども同士の トラブル	母子分離
子ども同士の関係	13	0
親子の関係	3	2
入園当初の適応	1	14
エピソード合計	17	16

② 親の気持ちは、幼稚園入園から小学校入学まで一貫して、子どものコミュニケーション能力であった。しかし親は、新たな関係性を結ぶべくガイドするより、手慣れた関係を維持するような考え方を持っていた。ここに幼児教育の専門家がその専門性を発揮する意義があると考えられる。

③ 家庭から幼稚園への環境移行では、3歳児入園初期には慎重さまたは躊躇ともとれる「動けなさ」が見られた。従来考えられていた新奇な環境における危険回避というより、新奇に遭遇した集団事態への適応の過程と考えられる。この状態を破るのは、非対称的な関係性や、3歳児の偶発的な行動であった。

④ 幼稚園から小学校への環境移行では、子どもなりの戦略性がみられた。入学当初に見られた教師や周囲への過剰な対応が次第に選択的になったり、他児の行動様式を模倣して自分の意思表示に活かすなど、即時的な反応を避ける「溜め」のある対応をしていたり、意図的に活動の文脈に自らを位置づけず、自分の範疇にとどまったりしていた。

⑤ 環境移行を支えているのは、子どもや教師が拠り所とする園や学校の文化や生活習慣などについての組織化された見方である。見

方の組織化は、保育・教育として可能なストーリー・テリングの遂行によって支えられ、さらにそのストーリーを支え、教育実践を機能させるのは社会的・生態学的システムであると考えられる。

⑥幼稚園・保育所で子どもが学ぶことの認識には、親、保育者（幼稚園教員・保育所保育士）、小学校教員では差があった。第1位の項目は、親はコミュニケーション能力、保育者は集団の中で協力すること、小学校教員も集団の中で協力することであった(表2参照)。

表2 幼稚園・保育所で子どもが学ぶこと(重みづけ後)

	小学校 教員	幼稚園 教員	保育所 保育士	保護者
努力・粘り強さ	0	4.0	0.66	0
集団の協力	6.33	4.5	6.16	2.16
同情・共感	1.5	0	2.0	2.16
コミュニケーション能力	1.33	4.0	0	9.0
身体的技能	1.0	0	0	0.5
健康・衛生習慣	3.83	2.5	5.66	0.5
他者に優しく	1.0	0	0.5	0.66

しかし、小学校教員と幼稚園教員及び保育所保育士の考える集団の概念は異なる可能性が示唆された。

⑦幼稚園・保育所・小学校連携の観点から検討した結果、教育課程への取り組みの不十分さと幼稚園・保育所と小学校との間にあるスタッフ間の関係の不均衡さが浮かびあがった。小1プロブレムの解消に特化している今日の連携では、相互の対等な関係形成は困難であると考察された。

(2)得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

①生涯発達の視点を導入したことにより、家庭から幼稚園・保育所、さらに小学校入学までの子どもの発達を追跡することができた。とりわけこの時期における親の社会化についての認識の変容を明らかにし、親と子ども双方の自立・自律の過程を示すことができた。今後の家庭教育や就学前施設での教育については、親の認識に焦点を当てる必要がある。

②親の幼稚園選択の実情が明らかにされたが、規制緩和による教育(保育)の質の低下

が懸念される。諸外国のように親の意見を取り入れると同時に、子どもや保護者の対人関係に広がりや深まりを保证するような専門的な対応が必要と考えられる。

(3)今後の展望

①幼稚園教員や保育所保育士の養成課程における教育の質向上が必須である。親への子育て支援と同時に、子ども同士の対人調整力を育成する教科内容やその指導が可能な教員の配置が必要である。2年間の養成年限では不足であり、5歳児の義務教育化をも視野に入れた学際的な研究が必要である。

②幼稚園、保育所そして小学校の連携においては、スタートカリキュラムの実施という観点を越えた、いわば幼児期から児童期における発達を保证する一貫したカリキュラムの開発が要請される。その取り組みは行政主導で推進され始めたが、今後一層の進展が期待される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

①加藤美帆・高濱裕子・酒井朗・本山方子・天ヶ瀬正博「幼稚園・保育所・小学校連携の課題とは何か」お茶の水女子大学人文科学紀要 査読有 第7巻 2011年 87-98

<http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/handle/10083/1869/bulletin/>

②高濱裕子・渡辺利子「家庭から就学前施設への環境移行：幼稚園入園をひかえた子どもをもつ親の関心」お茶の水女子大学人文科学研究 査読有 第6巻 2010年 95-106

<http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/handle/10083/1869/bulletin/>

[学会発表] (計12件)

①江村綾野・高濱裕子・本山方子「3歳から就学期までの環境移行と社会化プロセス

(5)：幼稚園・保育所で子どもが学ぶことを、幼稚園・保育所の保育者と小学校教員はどのように認知しているか」日本発達心理学会第22回大会 2011年3月26日 東京学芸大学

②北村宜子・本山方子「就学期の環境移行における子どもの両義的行為の生成：〈適応〉の観点から」日本発達心理学会第22回大会 2011年3月27日 東京学芸大学

③高濱裕子「3歳から就学期までの環境移行と社会化プロセス(4)：子どもの入園から半

年後に親が記述した印象的なエピソードの
分析」日本発達心理学会第 21 回大会 2010
年 3 月 27 日 神戸国際会議場

④本山方子・北橋奈実・北村宜子・天ヶ瀬正博
「幼稚園における園児の環境利用(4)：文化性の発揮」日本発達心理学会第 21 回大会
2010 年 3 月 28 日 神戸国際会議場

⑤北橋奈実・北村宜子・本山方子・天ヶ瀬正博
「幼稚園における園児の環境利用(5)：環境の成層化」日本発達心理学会第 21 回大会
2010 年 3 月 28 日 神戸国際会議場

⑥北村宜子・北橋奈実・本山方子・天ヶ瀬正博
「幼稚園における園児の環境利用(6)：見
たてにみる環境の交錯」日本発達心理学会第
21 回大会 2010 年 3 月 28 日 神戸国際会議
場

⑦高濱裕子・北島莉佳「3 歳から就学期まで
の環境移行と社会化プロセス(2)：幼稚園・
保育所で子どもが学ぶこと」日本発達心理学
会第 20 回大会 2009 年 3 月 24 日 日本女子
大学

⑧北島莉佳・高濱裕子「3 歳から就学期まで
の環境移行と社会化プロセス(3)：幼稚園入
園をひかえた子どもをもつ親の関心事」日
本発達心理学会第 20 回大会 2009 年 3 月 24
日 日本女子大学

⑨天ヶ瀬正博・山本直・北橋奈実・本山方子
「幼稚園における園児の環境利用(1)：総論」
日本発達心理学会第 20 回大会 2009 年 3 月
24 日 日本女子大学

⑩山本直・北橋奈実・天ヶ瀬正博・本山方子
「幼稚園における園児の環境利用(2)：人的
環境」日本発達心理学会第 20 回大会 2009
年 3 月 23 日 日本女子大学

⑪北橋奈実・山本直・天ヶ瀬正博・本山方子
「幼稚園における園児の環境利用(3)：物的
環境」日本発達心理学会第 20 回大会 2009
年 3 月 23 日 日本女子大学

⑫高濱裕子「3 歳から就学期までの環境移行
と社会化プロセス：研究の構想」日本発達心
理学会第 19 回大会 2008 年 3 月 20 日 大阪
国際会議場

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高濱 裕子 (TAKAHAMA YUKO)

お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学
研究科・教授

研究者番号：10248734

(2) 研究分担者

本山 方子 (MOTOYAMA MASAKO)

奈良女子大学・文学部・准教授

研究者番号：30335468

(3) 連携研究者

天ヶ瀬 正博 (AMAGASE MASAHIRO)

奈良女子大学・文学部・准教授

研究者番号：00254376

酒井 朗 (SAKAI AKIRA)

大妻女子大学・家政学部・教授

研究者番号：90211929

渡辺 利子 (WATANABE TOSHIKO)

武蔵野大学・人間関係学部・准教授

研究者番号：60258928

浜田寿美男 (HAMADA SUMIO)

奈良女子大学・名誉教授

研究者番号：50113105